

## 第5課「環境」

- \* 神は人類に素晴らしい環境を与えて下さった。罪を犯す前の世界を私たちは創造することができない。おそらく私たちの考えをはるかに超えた環境が与えられていたに違いない。そんな素晴らしい世界が人間の犯した罪によって台無しになってしまった。しかし、神はそんな状態にありながらも自然界を通してご自身の愛をお示し下さっている。キリスト者は神の恵みと愛のうちに地上の小さな天国を築いてゆく者となりたい。

### 1. 世界の創造の始めと今

- **愛の計画**：神は完全な環境のもとに完全な人類をおかれ、更に成長し続けるように願われた。まず環境が備えられた（自然界とそこに生存するもの）、そして神のかたちにアダムが創造され、アダムからエバが創造された（創世1：1～2：7）。彼らは地球において神の品性を現す存在として創られた。そして人類は永遠に成長し続けるものとされた（人としてその品性が永遠性をもつ神に向かって成長してゆくと思う）。これは決して不完全な今の状態から見るのではなく（完全という概念が最終形態であるという見方）、罪を犯す前の完全なる人間の視点である。考えられない程の大きな愛のうちに創造された人類は、創造主なる神のご計画のもとに創られた存在であり、存在する意味と目的を持っている（創造論）。決して偶然の連続で生まれた者ではない（進化論）。
- **創造の記念日**：安息日は万物の創造の記念日として神御自身が制定され、安息日を制定することによって全ての創造が完全に整えられた。本来、安息日は心身ともに安らぎと喜びを得、神との出会いを喜び、待ち遠しく思う日であった（今もそうでありたい）。しかし罪は労働の苛酷さ、人間関係のストレス、あらゆる悩みなどを生じさせた。罪の現実に苦しむ者（罪人である私たち）には、その問題に心奪われ、本当の安らぎの場を見失ってしまっている。罪の負い目は恥じる気持ちを起こさせ、神の目を恐れさせる（創世3：6～10）。神の定められた幸福の道をも遮らせた。それ故に私たちは神と共にある事の平安と喜びを体験する必要がある。安息日は世的なあらゆる煩いから離れ、神と共に過ごす時として認識し直し、本来の安息日の意味を取り戻す事の必要を感じる。
- **罪を犯した後の環境**：人類が罪を犯し、最初にその変化を見るのは、彼らの心であった。今まで感じる事なかった「恥」という感情が表れた。それは彼らをおおっていた栄光が取り去られる事であった。そして罪は人類が責任を任せられている自然環境に表れた。「土が呪われ」（創世3：17～19）労働が苛酷なものとなった。罪によって衰えた人類の状態と相まって地上の環境も大きく変化した（必然的にそうなる）。「死」の気配が人類に不安を与えた。それはまず自然界に表れた。葉は落ち、花はしぼみ、そして枯れていった。悲しみと恐れ不安が心を覆った。人間同士の関係も愛が枯れる現実の中で悲惨なものへと変わりはじめた。アダムとエバは、お互いの罪の責任のなすりつけを始めた（創世3：12～13）。不安の影は環境と人の心に広がっていった。現代において、私たちは文明の発展、技術開発の向上、科学の進歩など（本来は素晴らしいこと）による恩恵を受けているが、同時にそれらが人の私利私欲によって悪しき結果を招いている。良きものを悪しきものに変え、生命を脅かし、やがて破滅を招く恐れをはらんでいるのも事実である。

### 2. 環境を守る

- **誰によって創られ与えられたかを考える**：自然環境は神の創造によるものであり、神によって支えられている。また、恵みとして人類に与えられた。そういう意味からも自然環境は神のものであり、また私たち人類のものである。そして、そこには守り、支え、豊かにする責任が伴う。神は常にその責任を果たされる。しかし、人類はその責任を怠っているばかりでなく、破壊している（水や土地や空気の汚染、食料問題、植物や森林、動物や昆虫など全ての生物など）。私たちは自然環境が神によって創られ恵みとして与えられている事を自覚する必要がある。神は私たちの全ての必要を満たす為に、私たちが生きる為に、私たちが共に愛し合う為に自然の恵みを備えられた。決して私たちがその欲望と悪意をもって自分勝手にできるものではない（詩篇24：1）。守り、分かち合い、よりよい環境を創る事が必要である。私には何ができるかを考える。まず身の回りを眺めてみる。できるところから始める。行動に移さなければ意味がない。
- **創造主を礼拝する**：創造主なる真の神を愛し礼拝する事は、全ての基となる。「第一のものを第一とする」ことは基本中の基本である（黙示14：7）。人類は罪によって神から離れる事により、神以外の偶像に礼拝の対象を求めてしまった。その中でも「太陽崇拝」は最も身近に恵みと力を感じるものであったのだろう。全ての偶像に関わりを持っているようにも思う。太陽だけでなく、月や星（星座）、天の万象に対しても偶像となしてしまった（列王下23：5、エレミヤ8：2、エゼキエル8：16）。それらは時に占いに用いられ人の生活の中に巧みに侵入し、大きな影響を与えてきた。サタンは神以外のものに私たちの心に向け、神以外のものに使える事にしむける事で成功している。終わりの時代には選民をも迷わそうとサタンは激しく働きかける。私たちは改めて、私たちのために森羅万象を創造し備えて下さった神にこそ感謝と讃美、礼拝が捧げられるべきである事を覚えたい。そうすれば自然環境に対する責任の自覚は高められてゆくのではないだろうか。